

令和元年5月28日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02548

研究課題名(和文) フランス第二帝政期の文学場と芸術美学

研究課題名(英文) Research on the literary field and the aesthetic thought during the Second Empire period

研究代表者

菅谷 憲興 (SUGAYA, Norioki)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：50318680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランス第二帝政期の文学をその固有の歴史性においてとらえ直すべく、「文学場」の分析という社会的視点と美学思想史的視点の両面から検討することを目的とした。第二帝政期の作家たちは「芸術の自律性」への志向において際立っているが、これを当時の歴史的文脈に置き直すことにより、この時代の文学の「現代性」とみなされているものが、ロマン主義からの断絶というよりは、むしろその発展・継承としてとらえられることを明らかにした。ロマン主義第一世代から小ロマン派、そして一八四八年世代へと続く流れを再検討することで、十九世紀文学史全体をロマン主義が提起した問題系の延長として理解する可能性を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス文学研究においては、従来、十九世紀前半と後半を切り離して考察する傾向があった。ボードレーやフローベールといった第二帝政期の作家たちの「現代性」を、世紀前半のロマン主義からの切断とみなし、二十世紀の先鋭的な文学的試みの出発点として位置付けるといった歴史観は、しかしながら、ここ十数年来、フランス・ロマン主義の再評価とともに根本的な見直しを迫られている。本研究は、ネルヴァルやゴーチエなど小ロマン派を含めた第二帝政期の文学の側からロマン主義およびその時代の思想・哲学を振り返ることで、十九世紀フランス文学を一つの総体としてとらえる観点を提示することができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：This study examines the inherent historical relevance of the literature produced during the Second Empire period from both the sociological point of view through an analysis of the 'literary field' and the historical point of view of aesthetic thought. The writers of this era are distinctive because of their intention to promote the 'autonomy of art'. However, by re-establishing this attitude within its historical context, it becomes evident that the perceived 'modernity' of literature of this period can more precisely be considered to be the development and inheritance of romanticism rather than a departure from romanticism. By re-examining the intellectual current that continues from the first generation of romanticism to minor romanticism and then the 1848 generation, the historical course of nineteenth century literature can be understood as an extension of the issues raised by romanticism.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学史 第二帝政 ロマン主義 哲学史 宗教文化 文化史 二月革命

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第二帝政期の文学についての研究は、おおむね二つの傾向に分離しているといえる。第一の傾向である社会学的視点を代表するのが、ピエール・ブルデューの『芸術の規則』(1992)であるが、「文学場」という概念を提唱したことで名高いこの書物は、しかしながら、文学創造の意味を作家の「社交性」の問題に還元するものだという批判をしばしば受けてきた。ブルデューに限らず、第二帝政という専制的な政治体制と同時代の作家たちとの関わりを問う論者の多くは、文学に性急な政治性をもとめるきらいがあり、その過度にイデオロギー的な分析には、これまで多くの研究者が反発を示してきた。一方で、第二の傾向である専門の作家研究については、特にフランス系の文学研究においては、依然としてテキスト論的な分析が幅を利かせており、分析自体はますます精緻になってはいるものの、往々にして歴史的・社会的文脈が軽視されがちであることは否定しがたい事実である。確かに第二帝政期の作家たちは、ある特定の社会状況のもとで「芸術の自律性」を主張したわけだが、現代の批評・研究がこれを字義通りに受け取る必要は必ずしもないであろう。こういったごく当然の批判が、最近ようやく研究者の側から出てきたところであり、この時代の作家たちの芸術美学をその固有の歴史性において理解する作業は、未だ端緒にすぎないといえる。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、第二帝政期の文学に社会学的視点(「文学場」の分析)と美学思想史的視点(芸術美学の系譜学)の両面からアプローチすることで、その総合的な把握を目指すものである。
(2) 第二帝政期は、歴史学的には、十八世紀末のフランス革命以降、民主主義化の方向に向かってきたフランス社会が経験した深刻な挫折の時代であると同時に、文学史的には、フローベールやボードレールなど後世にまで残る多くの作品が生まれ出された最も豊穡な時代でもある。この逆説的な状況のもつ意味を探るべく、当時の作家たちの置かれた政治的・社会的立ち位置を見定め、この時代の文学と政治との奇妙な「共生」の様態を明らかにする。
(3) 第二帝政期の文学創作を特徴づける「芸術の自律性」の思想を歴史的に位置づけるためには、ロマン主義の影響が決定的に重要である。そもそもフランスのロマン主義の芸術思想は、ドイツ・ロマン派およびドイツ観念論哲学のフランスへの導入を通じて形づくられたものだが、そのような中から、美的領域はそれ自体で価値を持つという思想が徐々に練り上げられることになる。それが様々な紆余曲折を経ながら、ユゴーらのロマン主義第一世代、小ロマン派、さらに一八四八年世代へと受け継がれていくのだが、その決して単線的とはいえない複雑な思想的系譜を、実際の作品分析とも絡めながら、詳細に跡づけることを目指す。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、社会学的な視点と美学的な視点を組み合わせることにより、第二帝政期の文学のあり方を解き明かすことを目指した。役割分担としては、最初は、おもに菅谷が第二帝政期の文学場の分析を、辻川がロマン主義と第二帝政期との関連を、さらに山崎が美学思想史の検討を担当することにした。ただし、研究を進めるにつれて、ロマン主義の特異性と重要性が明らかになったこともあり、途中からこの問題に大きな比重を置くことになった。その際、政治や宗教から生物学までを包み込む領域横断的な思潮であったフランス・ロマン主義の特徴を正確にとらえるため、学際的な視点を重視するよう努めた。具体的には、菅谷は医学史、辻川は宗教学、山崎は哲学史の知見を活かして、文学テキストをつねに同時代の知との関係性において把握するよう心掛けた。

(2) 定期的に研究会を開くことにより、各人の研究成果を報告し、議論することに努めた。また二年目以降は、本研究の幅を広げるため、本科研のメンバー以外の研究者を講師に呼び、おもにロマン主義や宗教文化についての理解を深めた。研究会は立教大学・菅谷研究室において計11度開催した。発表者とテーマは以下の通りである。

2016.5.27、木内堯(学振特別研究員PD)「フローベールにおけるユゴー美学の継承」

2016.9.24、山崎敦「フローベールとクザンの美学」

2017.1.9、辻川慶子「ネルヴァルと宗教 演劇、大聖堂、書物」

2017.3.11、菅谷憲興「フローベールと生気論 自然発生説と生の誕生の物語化」

2017.7.1、木内堯「フローベール『感情教育』におけるミシュレ」

2017.9.23、中島太郎(中京大学)「プロテスタンティズムと19世紀フランス文学」

2017.12.17、坂本さやか(白百合女子大学他・非常勤講師)「ミシュレ と脱象徴化の問題」

2018.2.16、片岡大右(一橋大学他・非常勤講師)「ポール・ベニシュ『預言者の時代』について」

2018.7.21、木内堯「『ボヴァリー夫人』と版画」/菅谷憲興「『哲学的臨床医 praticien philosophe』とは何か？」

2018.9.29、辻川慶子「1848年後と集合性の夢 ネルヴァルとウージェーヌ・シュール『民衆の秘密』」

2018.12.22、山崎敦「『ブヴァールとベキュシェ』における自由意志の問題」

4. 研究成果

(1) 本研究は、フランス第二帝政期の文学を歴史的な文脈においてとらえ直すという問題意識

のもとに行なわれた。当初は文学場と芸術美学という二本の柱を立てて臨んだが、結果として、そのどちらの面においても、ロマン主義の決定的な重要性を再認識することになった。実際、ネルヴァルやゲーティエといった小ロマン派、それからフローベールやボードレールといった一八四八年世代は、「世俗的な聖職者」として振舞うことのできたロマン主義第一世代に対する共感と反発を通して、自らの作家としてのエートス、そして芸術美学を形づくっていったのだが、従来の研究においては、第二帝政期の文学の「現代性」が過度に強調されるあまり、それが実は世紀前半の文学の中にすでに胚胎していた諸問題を発展させたものかもしれないという、すでにポール・ベニシュ（『作家の聖別』、1973）によって指摘されていた可能性が見過ごされてきた。とりあえず本研究の枠内では、「芸術の自律性」を主張する第二帝政期の文学をロマン主義との断絶としてではなく、その延長ととらえる仮説を提示することで、今後の研究につなげることができたと考えている。三年間という限られた期間ではあるが、発表した業績の数から見ても、十分な成果をあげることができたと自負している。

(2) 菅谷はこれまでに得た医学史の知見を活かして、第二帝政期の作家と科学の関係について、社会学的観点（雑誌論文、学会発表）と思想史的な観点（学会発表）の両面から分析し、その成果を国際学会で発表した。また集英社文庫から出した『フローベール』（図書）において、『ブヴァールとペキュシェ』の翻訳を担当したのみならず、編集協力者として全体の解説を執筆し、十九世紀中葉の文学場とフローベールの美学の独自性について論じた。さらに、2017年にフランスで刊行された『フローベール事典』（図書）は世界各国の90名の研究者が参加した1750頁に及ぶ大著であるが、その責任編集者の一人を務め、文学と科学の関係や小説美学に関する41項目を執筆した。

(3) 辻川は、第二帝政初期におけるロマン主義の批判的再検討という問題に取り組むために、歴史・政治と文学の関係、およびリライトの問題という二つの観点から研究を進めた。第一に関しては、ネルヴァルにおける歴史叙述の問題を同時代の歴史的な文脈との関連で論じ（図書）、さらに政治的権威と文学的権威との相克を、十九世紀中葉における新聞法改正を通して分析し、国際学会で発表した（学会発表、図書）。第二に、ネルヴァルおよび小ロマン派の作家によるリライトの問題に取り組み、二冊の共編著（図書、）を刊行した上で、宗教、系譜、歴史などのロマン主義的テーマのリライトの持つ歴史性と両義性を明らかにした（学会発表、図書）。

(4) 山崎は、フランス・ロマン主義美学の形成に大きな役割を果たした哲学者ヴィクトル・クザンを取り上げ、フローベールの文学との関連においてその美学思想を検討する一方で（雑誌論文）第二帝政期の作家のみならずロマン派をも特徴づける懐疑主義に着目し、フローベールがこの思想にいかなる文学的表現を与えたのかを分析した（雑誌論文及び、学会発表）。これらの研究はいずれも文学と哲学、あるいは文学史と哲学史をクロスさせた学際的手法に基づいているが、こうした近年の研究成果も盛りこんだ博士論文をパリ第八大学に提出し、2019年3月12日に公開審査を受け、文学博士号を取得した（図書）。

(5) 最後に、研究最終年度に当たる2018年度に、ロマン主義についての理解を深めるため、二名の研究協力者を招聘し、公開講演会を開いた。まず東京大学本郷キャンパスで10月29日に「ラマルチーヌとメランコリー」と題した講演会を開催。ロマン主義最大の詩人の一人でありながら、日本ではまだほとんど研究されていないこの作家の詩学について、パリ第三大学准教授のオーレリー・フォリア氏に語っていただいた。次いで立教大学で10月31日に「ロマン主義と文学の現代性」と題した講演会を開催。フォリア氏にロマン主義の側から見た十九世紀文学史の再検討を行っていただいた後に、東京大学教授の野崎歆氏に日本におけるロマン主義の受容について解説していただいた。どちらの催しも盛況であったが、特に立教大学での講演には80名近い聴衆が集まり、この問題についての関心の大きさがうかがえると同時に、あらためてフランス・ロマン主義がアクチュアルな問題になりつつあることを認識した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

Atsushi Yamazaki, *Bouvard et Pécuchet*, un roman sceptique, 立教大学フランス文学、査読無、48号、2019、29-41

Aurélie Foglia, Révolutions du lyrisme, 立教大学フランス文学、査読無、48号、2019、63-74

Kan Nozaki, Pour une réhabilitation de Lamartine au Japon, 立教大学フランス文学、査読無、48号、2019、75-79

Norioki Sugaya, Bouvard et Pécuchet face à la bibliothèque du praticien philosophe, site Gustave Flaubert, 査読有、2018、(web雑誌なのでページなし)

URL : <https://flaubert.univ-rouen.fr/article.php?id=69>

Norioki Sugaya, Le portrait de l'artiste en hystérique : Emma et la Guérine, *Europe*, 査読無、N.1073-1074、2018、211-220

菅谷憲興、ジュネットの憤み ジェラルール・ジュネット追悼、週刊読書人、査読無、3252号、2018、7

URL : <https://dokushojin.com/article.html?i=4056>

山崎敦、ブヴァールとペキュシェの弁護(1)(2)、国際教養学部論叢、中京大学国際教養学部、査読有、第10巻、第2号、2018、11-32、33-55

山崎敦、フローベールとヴィクトル・クザンの哲学(1)、国際教養学部論叢、中京大学国際教養学部、査読有、第9巻、第2号、2017、97-112

菅谷憲興、専制に抗する礼節 工藤庸子『評伝 スタール夫人と近代ヨーロッパ』書評、週刊読書人、査読無、3172号、2017、4

URL: <https://dokushojin.com/article.html?i=680>

〔学会発表〕(計7件)

Norioki Sugaya、Réflexion sur l'indécidable flaubertien : à partir de la traduction de *Bouvard et Pécuchet* en japonais、Séminaire Flaubert « Médiations : presse, édition, traduction, variation », Institut des Textes et Manuscrits Modernes (CNRS)、2019

Atsushi Yamazaki、*Bouvard et Pécuchet*, un roman sceptique、Journée d'études « Flaubert, Spinoza, Bergson - Littérature et philosophie dans la France du XIX^e siècle », 立教大学、2018

辻川慶子、言葉と記憶 フランス小口マン派およびネルヴァルにおける引用の詩学、シンポジウム『フランス中世から20世紀文学における書き直し(リライト)の歴史』、白百合女子大学、2018

Norioki Sugaya、*Bouvard et Pécuchet* face à la bibliothèque du "praticien philosophe"、Rencontre « La bibliothèque médicale des Flaubert », Musée Flaubert et d'histoire de la médecine、2018

Judith Lyon-Caen、Keiko Tsujikawa、Une réflexion sur autorité politique et autorité littéraire autour de l'amendement Riancey (16 juillet 1850)、colloque international « Littératures et autorités », アンスティチュ・フランセ九州、2017

Norioki Sugaya、*Mise en scène d'une pensée de la vie. Le cas des romans de Flaubert*、Colloque international « Création littéraire et savoirs du vivant au XIX^e siècle », Fondation Maison des Sciences de l'Homme de Paris、2017

辻川慶子、系譜と詐称 レチフ、ネルヴァル、シュエと遺産創生の物語、日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ、東北大学、2016

〔図書〕(計8件)

篠田勝英、海老根龍介、辻川慶子他、水声社、引用の文学史—フランス中世から二〇世紀文学におけるリライトの歴史、2019、384(181-198、347-368)

Gabrielle Chamarat、Sylvain Ledda、Keiko Tsujikawa 他、Presses Universitaires de Namur、Nerval écrivain, Hommage à Jacques Bony、2019、284(43-55)

Atsushi Yamazaki、Université Paris VIII、*Bouvard et Pécuchet*, le roman philosophique : classification, magnétisme, philosophie、2019、t.1、369、t.2、272

Gabrielle Chamarat-Malandain、Jean-Nicolas Illouz、Mireille Labouret、Bertrand Marchal、Henri Scepi、Gisèle Séginger、Keiko Tsujikawa 他、Classiques Garnier、Gérard de Nerval, histoire et politique、2018、434(231-243)

Gisèle Séginger、Juliette Azoulai、Yvan Leclerc、Norioki Sugaya、Atsushi Yamazaki 他、Honoré Champion、Dictionnaire Flaubert、2017、1771

野呂康、中畑寛之、嶋中博章、杉浦順子、辻川慶子、森本淳生、吉田書店、GRIHL-文学の使い方をめぐる日仏の対話、2017、396(331-347、357-362)

海老根龍介、辻川慶子他、弘学社、芸術におけるリライト、2016、214(27-42)

堀江敏幸、菅谷憲興、菅野昭正、笠間直穂子、山崎敦、集英社文庫、ポケットマスターピース07・フローベール、2016、842(547-774、792-842)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：辻川 慶子

ローマ字氏名：(TSUJIKAWA, Keiko)

所属研究機関名：白百合女子大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：80538348

研究分担者氏名：山崎 敦

ローマ字氏名 : (YAMAZAKI, Atsushi)

所属研究機関名 : 中京大学

部局名 : 国際教養学部

職名 : 教授

研究者番号 (8桁) : 70510791

(2)研究協力者

研究協力者氏名 : オーレリー・フォリア

ローマ字氏名 : (Aurélie FOGLIA)

研究協力者氏名 : 野崎 歓

ローマ字氏名 : (NOZAKI, Kan)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。